

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：15201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590113

研究課題名(和文) 性別役割規範システムの国際比較研究

研究課題名(英文) International Comparative Study on the Structure of Attitudes toward Gender Role Norms

研究代表者

吹野 卓 (FUKINO, Takashi)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：70228873

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、トルコ・アメリカ・日本の大学生を対象として質問紙調査を実施し、性別役割規範の国際比較研究を行うものである。異なる言語を用いた国際比較研究においては、各国内部での規範システムの特徴を抽出し、そのパターン同士を比較するといった工夫が必要である。本研究では、メタレベル規範などの概念を用い、その問題をある程度解決できたと思われる。データ分析で示されたトルコ・アメリカ・日本の各国の男女間にみられる性別役割規範の内面化パターンを読み解き、それぞれの国がもつ文化的特徴に関する一定の知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This international comparative research examines the norm of gender role based on the survey data of undergraduate students in Turkey, Japan and the United States. By using concepts of object-level norm and meta-level norm, we tried to make a methodological contribution by showing possibilities for solving problems of cross-national comparative research (e.g., a problem of understanding the exact meaning of the content in each language). We compared two points: 1) whether the object-level norm is internalized equally in men and women or not, 2) if the object-level norm is internalized equally in men and women at all, whether the meta-level norm is strongly internalized equally in both sexes or not in three countries. We can say it is the first step toward understanding different cultures and thinking the trajectory of how to achieve the gender-equal society in respective societies

研究分野：社会学

キーワード：性別役割規範 国際比較研究 トルコ アメリカ 日本

1. 研究開始当初の背景

われわれの研究グループは、2007年から2009年にかけて、トルコ・アメリカ・日本の学生を対象とし、主として夫婦関係に関する調査を実施した経験を有している。この調査には、男女の役割に関する意識項目も含まれており、3カ国の男女で、かなり異なる傾向を示していることを見出した。ただし、この調査において、性別役割規範に関する質問項目数は限られていた。

一方で、複数の言語を用いた国際比較研究において、比較を可能とする妥当な分析枠組みの確立への困難さも認識された。

また、別途実施した原子力発電所に関する調査において、原発など特定の社会的イシューに対しては意識の男女差が大きく、かつその差異を性別役割規範の受容から説明できるという知見も得た。

以上を踏まえ、方法論的検討も含む、性別役割規範システムの国際比較研究を企画し、再びトルコ・アメリカ・日本の研究者による共同研究を立ち上げた。

2. 研究の目的

本研究は、トルコ・アメリカ・日本の若者を対象として、性別役割規範システムの国際比較を行うものである。

性別役割規範は、社会の全メンバーを二分して一定の行動様式を要請するものであり、各社会の基本的な構成原理のひとつである。この性別役割規範を規範システムとして捉え国際比較することは、各社会がもつ文化的特徴を理解する上での意味は大きいと思われる。特にトルコと日本を同時に含む国際比較研究は、極めて少なく、この点における異議も大きいと言えよう。

さて、異なる言語の質問票を用いた国際比較研究においては、語感や言葉の指し示す範疇の相違などの問題が存在している。この問題を避けるためには、まず各国内部の、すなわち同じ言語で測定された回答者の間でみられるパターンを抽出し、そののちにその各国のパターン間で国際比較を行うことが望ましい。上で「回答者の間で」と記したが、これは回答者をなんらかの基準で区別することを前提としている。ところがこの区別すら、国際比較においては必ずしも自明のものとは限らない。

この点において、男女という社会的区分は、さまざまな社会的区分のなかでも際立って普遍性が高いという特徴をもっている。また性別役割規範に関しては、「『女性はこちらあるべきだ』と男性は思っている」といった、規範の対象となる人びとの性と、規範の担い手の性の組み合わせを考えることができる(図1)。この枠組みも普遍性が高いものであると言えよう。

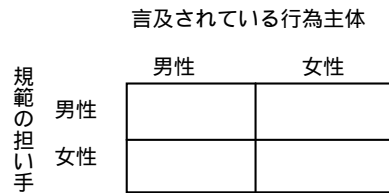


図1 規範の担い手と言及される行為主体の組み合わせ

更に、「『女性はこちらあるべきだ』と男性は思っている」ということが、ある社会の多くの男性において事実であるばあいには、その社会では男性はそのように思うべきだという規範の存在が示唆される。すわち、先の文は「『女性はこちらあるべきだ』と男性は思うべきだ」という、メタレベルでの性別役割規範を想定することができよう。

また、性別役割には、男女間の役割の相補性といった特徴もあり、規範間の関係の意味を理解し易いといった特性もある。

このような性別役割規範を各文化の特性を表すシステムとして捉え、その比較を通じて文化的差異を見出すとともに、国際比較の方法論的検討を進めていくことが研究目的である。

3. 研究の方法

研究組織は、日本から2名、トルコとアメリカから各1名ずつの計4名の研究者で構成し、各国の文化的背景への考察が十分にできる体制とした。

H25年とH26年には日本において、学生を対象としたプレ調査を複数回実施し、本調査に向けての分析枠組みを準備した。同時に原発といった社会的イシューに関する意識と、性別役割規範の受容の関係に関する調査と分析も行った。

H26年には上記を踏まえ、3カ国の研究者で綿密な検討を行い、質問紙を完成させた。なお、アメリカとトルコの研究者からの提言を受け、質問紙には、複数のパターンの仮想カップルに対するイメージを尋ねる部分を設けるなど、国際共同研究ならではの異なった視点からの展開も取り入れた。

本調査は、H27年度にトルコの Hacettepe University、日本の島根大学、アメリカの University of Florida の大学生を対象として実施した。回答者数は計1,611人である。

4. 研究成果

ここでは、主としてH28年度に公表した論文、およびアメリカ家族社会学会での発表用ペーパーに基づいて、成果報告をしたい。

先に述べたように、例えばあるイシューについて「『女性はこちらあるべきだ』と男性は思うべきだ」といった規範をメタレベル規範と考えることができる。

以下では、メタレベル規範の内容である

『女性はこうあるべきだ』部分が規範の担い手(上記の下線部)の性によって異なるのか、仮に相違がないとしても、このメタレベル規範の内面化の強さが担い手の性によって異なるのか、の2つに焦点を当てて、3カ国の比較を行う。なお前者を規範内容の不一致、後者を規範強度の不一致と呼ぶこととする。

用いた質問票には、ジェンダー・家族・結婚・子育てなどに関する意見を尋ねた質問項目が53項目あり、さらにその一部は、様々な 이슈に関して「男性はどうあるべきか」と「女性はどうあるべきか」をペアで尋ねた質問項目(44項目/22ペア)である。これらの質問項目は全て、「とても賛成」(5点)から「とても反対」(1点)までの5点尺度で測定している。

質問票に含まれているペア項目の1つである「男性は、妻と子どもをまもるべきだ」と「女性は、夫と子どもをまもるべきだ」について、3カ国の男女回答者平均値を示したのが表1である。

表1 「家族をまもるべき」の平均値

担い手の 規範	トルコ		日本		アメリカ	
	規範の対象		規範の対象		規範の対象	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
男性	4.45	4.48	3.84	4.17	4.56	4.69
女性	4.29	4.33	3.99	4.13	4.50	4.54

この表からトルコと日本の平均値を図に示してみよう(図2)。

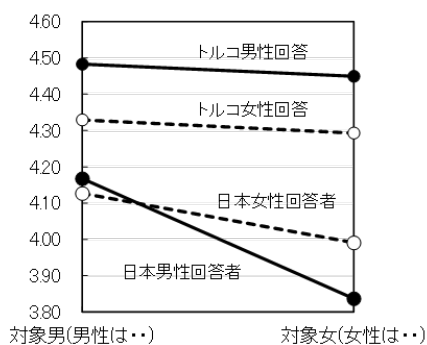


図2 2種類の不一致の読み取り

この図で日本の回答者は男女で線の傾きが異なっている。これは先に述べた規範内容の不一致を示していると言えよう。この場合には分散分析の結果で交互作用があることが見出されることになる。一方、トルコの回答者は男女の線が平行だが、その高さが異なっている。これは規範強度の不一致を示していると言えよう。この場合には、分散分析の結果で回答者男女での差が見出されることになる。

分析の方針は、このメタレベル規範における男女間の2つの不一致の度合いを国別に比較するというものである。(なお、図2でト

ルコの回答者の方が日本の回答者より高い位置に線が引かれているが、この点は異なる言語の調査票を用いているため比較不能であることに注意して頂きたい。一方で、トルコの男女が示すパターンと、日本の男女が示すパターンとのパターン間の比較は意味を持っている。)

我々の質問票に含まれる項目は、必ずしも網羅的なものとは言えないが、ある程度多岐にわたる 이슈について尋ねている。我々の質問票のなかで、ペア項目の交互作用が有意であった数と、すべての質問項目への回答の男女差が有意であった数はどのようになっているであろうか。表2はその結果を示したものである。

表2 3カ国における2種類の不一致数

	トルコ	日本	アメリカ
22ペア項目中で交互作用が有意だったペア数(%)	8 (36.4%)	5 (22.7%)	2 (9.1%)
53項目中で回答者男女差が有意だった項目数(%)	32 (60.4%)	24 (45.3%)	34 (64.2%)

ここから回答者性別と規範対象の性別に有意な交互作用が見られたペア数、すなわち規範内容の不一致が示唆された数は、トルコ、日本、アメリカの順になっており、特にアメリカで規範内容の男女での一致度が高いことが示唆される。

また、回答者の性別による平均値に有意差があり規範強度の不一致が示唆される、質問項目の数は日本で少ない。すなわち、日本はトルコとアメリカに比べ、一定の性別役割規範に従うべきという規範の強度の男女差が小さいと示唆される。

各国の特徴を整理すれば、以下のことが推測される。

トルコでは、様々な 이슈に関して「男はこうあるべきだ、女はこうあるべきだ」というイメージが男女間でかなり異なり、かつ仮に一致としていてもそう思う程度が男女で異なっている。これは男の世界と女の世界に距離があることを示しているのかもしれない。

日本では、様々な 이슈に関して性別役割規範に従うべきだという規範強度の男女差が少ない。これは男女に役割差がないということではなく、男女に役割があるということについての男女での意識の違いは小さいことを意味する。これは、男女平等な社会を築くという方向での契機が少ないという帰結をもたらすかもしれない。

アメリカでは、性別役割規範の強度は男女で大きく異なるが、その規範内容については男女間で差が小さい。すなわち、男らしさ・女らしさについてのイメージは男女差が少ないにせよ、それをまもるべきかについての

性差は大きく、男女平等社会実現への方向性が女性リードで行われていることを示しているのかと思われる。

トルコ、日本、アメリカという3つの国は、その文化的な背景を全く異にしている。ここで行った分析は、まだまだ不完全なものであるが、社会の基本的な構成原理のひとつと思われる男女の役割区分のありようが、ある程度見えるものとなっている。異なる文化の理解、さらに男女平等な社会実現への道筋を考えるための一歩となると言えよう。また、メタレベルの規範という概念を用いて3カ国で示されるパターン間の比較を行った。これは冒頭に述べた国際比較上の問題をある程度解決できる可能性を示した点で方法論的な貢献であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

吹野卓、片岡佳美、Zeynep Çopur, Tanya Koropecykj-Cox、性別役割規範システムの国際比較研究、島根大学法文学部紀要社会文化論集、査読無、13 巻、2017、21-30

片岡佳美、松江市「男女共同参画に関する市民意識調査」(2015 年)結果、男女共同参画に関する市民意識調査結果報告書、査読無、2016、49-65

片岡佳美、吹野卓、原子力発電に対する賛否規定要因の性別特性についての分析、島根大学法文学部山陰研究センター紀要山陰研究、査読無、7 巻、2014、1-14

吹野卓、片岡佳美、原発に対する意識と性別役割規範、島根大学法文学部紀要経済科学論集、査読無、40 巻、2014、45-56

吹野卓、片岡佳美、性別役割規範の担い手の分節状況についての考察 国際比較を目指して、島根大学法文学部紀要社会文化論集、査読無、10 巻、2014、1-8

〔学会発表〕(計 3 件)

Yoshimi Kataoka, Takasi Fukino, Tanya Koropecykj-Cox, Zeynep Çopur, "Understanding the Structure of the Gender Role Norms in Different Countries," National Council on Family Relations, 2017, 11 月 18 日(受理済) Annual Conference, Orland, FL(USA).

片岡佳美、吹野卓、人びとの性別役割意識の現状、「地域における女性問題の解決に向けて」シンポジウム、2016, 11 月 5 日、島根大学(松江市)

片岡佳美、現代日本における人びとにとっての家族、関西家族社会学研究会、2015, 8 月 1 日、桃山学院大学(和泉市)

〔その他〕

<http://mihonichi.shimane-u.ac.jp/articles/1/download>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吹野 卓 (FUKINO Takashi)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：70228873

(2) 研究分担者

片岡 佳美 (KATAOKA Yoshimi)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：80335546

(3) 研究協力者

Zeynep Çopur

Hacettepe University, Ankara, Turkey

Tanya Koropecykj-Cox

University of Florida, Gainesville, FL, USA